

高校調査書の信頼性についての一資料

中山 和彦

はじめに

大学入学者選抜の目的は、その大学が要求する水準内において、全ての学業過程を修了しうる能力を有し、かつ、その大学として望ましいパーソナリティーの持主を、志願者の中より選び出すことにある。したがって、入学者選抜に際しては、大学へ入学後どれだけの学業成績をあげるかを最も高く予測できるような方法をとることが望ましいわけである。

筆者の属する国際基督教大学における湯浅⁽¹⁾、原らの研究報告によれば、⁽²⁾同学が入学者選抜にあたり実施している学習能力考查の成績よりも、高等学校より提出せられた調査書（内申書）に記されている高校学業成績の方が、入学後4年間の学業成績を高く予測している。また伝統的な入学者選抜の方法である学力考查の形式をとっている大学、東大、京大やその他の国立大学においても、大学入学試験の成績よりも高校学業成績の方が、入学後の成績を高く予測することが知られている。⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾

それらの研究結果などから「大学入学試験の欠点を補うものとして、調査書に期待するところが少なくない」⁽⁶⁾と言われている。しかし、積極的に調査書を用いているのは、筆者の知る限りにおいては、国際基督教大学のみであり、他においては、参考資料として、あるいは慣習的に調査書を高校より提出させているに過ぎないようである。

調査書を重要な資料として用いていないのには、次のような二つの大きな理由があるように思われる。それらは、①高校による格差がありA校における5点と、B校における5点とは等価でない。したがって、均一の資料として調査書を用いられない。②高校から提出せられた調査書が正しい。

* 本稿は国際基督教大学教養学部入学試験委員会への資料として岡部弥太郎教授の指導のもとに作成せられたものである。

すなわち点数に水増しが行われているようなことはない、との保証はどこにもない。

以上の二理由のうち、第一のものについては、西堀らによれば、⁽⁶⁾「調査書に記載された高校学業成績には意外に学校差が小さい」とのことであるが、しかしこれは特定の学校のある年度に入学した者についての研究であるので、一般化することはできないかも知れない。それよりはむしろ現段階においては、学校差というものを仮に認めておいて⁽⁷⁾“岡部私案”のごとく、各大学が高校毎に予め報告された高校の点数と大学における学業成績との関係のウェイトを出しておき、それを報告された点数に掛けるというような方法をとった方がよいと考えられる。そうすれば学校間の格差はなくなり、調査書に記されている点数を均一資料として扱うことができるようになるであろう。第二の点については、“岡部私案”によれば、各大学でそのように高校毎に一定のウェイトを調査書成績に掛けるようになれば、自然に正しい成績をつけるようになる、とのことである。しかし、そのようになったとしても、大学側としては高校へ出かけて指導要録の原本を調べるようなことはできず、写しを出してもらいより他に方法はないのであるから、最終的には高校側の職業的倫理によらざるを得ないであろう。

高等学校より大学に提出せられている調査書には、指導要録の記載と異なるものもあるのではないかと、その信頼性についての疑いは抱かれているものの、高校調査書の信頼性についての実証的研究はまだ発表されていないようである。

筆者は、国際基督教大学において、入学者選抜に際して重要な一資料として用いられている「高等学校成績表^{*}」の信頼性を知るため、1962年度、1963年度、1964年度の一般受験者中、前に同大学を受験したことのあるものについて、前に提出された「成績表」と、新たに提出せられたものとの間

* 「高等学校成績表」とは同学独自の呼称で一般には調査書と呼ばれているものである。今後、本稿において「成績表」は、国際基督教大学へ提出せられたものを指し、「調査書」は広く一般的なもの指す場合に用いる。

における異同を調べてみた。

以下はその結果の報告である。（1965年度のものは附2に簡単に述べてあるので参照されたい）

結 果

1. 再受験者の人数

受験に際して提出せられた入学願書に「前にこの大学を受験したことがある」と記載してある者の中、旧い「成績表」と新しいものとを照合できた者の人数は、第1表のごとくである。

第1表 再 受 験 者 数

受 験 年 度		1964	1963	1962	計
受 験 者 数		1029	1412	1683	4124
再 受 験 者 数		112	87	92	291
出身 高校 種別	公 立	80	62	69	211
	私 立	23	16	15	54
	私 基 立*	6	7	7	20
	国 立	2	2	1	5
	検 定**	1	0	0	1

* 私基立とは、私立の基督教主義学校、いわゆるカトリック・スクール、クリスチャン・スクールなどを指す。

** 大学入学資格検定に合格した者は、「成績表」が提出せられないので、以下は統計よりはぶく。

それらを一般受験者全体に対するパーセントで表してみると、1964年度は11.5%、1963年度は7.1%、1962年度は5.5%となり、平均すると7.1%となる。

* 受験者には「一般」「推せん」「非日本人」「編入」などの別があり、再受験した者はいずれもこの「一般」に属している。

しかし新旧の「成績表」を照合することのできなかつた者が毎年10数名おり、その他入学願書に「受験したことがある」と記載しなかつた者のあることを考えに入れると、再受験をしているものは毎年10%を越えているのではないかと考えられる。

2. 記載事項の異同

高等学校より提出される「成績表」は文部省大学学術局長名にて指示のあった「調査書の形式」に則つたものである。しかし、裏面には志願者のパーソナリティを知るために附1のごとく、情緒の安定度、社会性、活動性、公民性の四項目についてそれぞれ“a”から“e”の5段階にその特徴が記されており、担任教師など本人を最も良く知っている人が、各項目へ一つずつ○印を付すことになっている。

「成績表」の提出時においては、高等学校学3年に存学中の者はその課程を終了しておらず、したがって第3学年の成績として記入せられているものは、1, 2学期の平均成績か、そのいずれかの単独の成績か、あるいは見込み点と呼ばれるところのものである。したがって卒業後提出せられた「成績表」の成績と、卒業見込み時のそれとの間には、第3学年に限り変化する可能性もある。また欠席日数が多くなることも第3学年に限り当然あり得る。しかし学習成績概評は、高等学校における3カ年間（定時制高等学校では4年間）における全教科の総合成績をA, B, C, D, Eの段階に分け、その志願者の属する成績段階を記入することになっている。したがって「成績表」が提出される時には卒業見込みの者であっても、すでに2年と2学期（あるいは3年と2学期）を経過しているのであるから、その後の1学期の成績如何によって志願者が属している段階が変わることは考えられず、また同様に成績段階人数の変ることも殆んど考えられない。

以上の変化は、いずれも卒業をしていない生徒が第3学年の過程を終了していないために生じることであつて、卒業した者には何ら変化の生ずる筈がないし、また卒業をしていない者にあつても、第2学年以前の記載に

は変化の生ずる筈はない。したがって旧い「成績表」と新しいそれとを比較してみて、もし変化の生ずる筈のないところに変化のあった場合には、それは記載の誤りか、あるいは虚偽の記載をしたためのいずれかであると考えられる。しかし、「成績表」は記載責任者が責任をもって指導要録の記載を忠実に転記したものである筈で、また、記載責任者と校長の2名が、「本書の記載に誤りが無いことを証明」している以上、単なる写し間違いとは考えられない。むしろ良く印象づけるために、志願者の成績を良くしたり、欠席日数を少なくしたりしたために生じた変化と考えられる。したがって、そのように有り得ざるべき変化が見られた「成績表」の記載には、新旧のいずれかに、あるいはその両方に虚偽の記載があったと断じて差支えない。

以上述べた以外の「成績表」に記されている事項の人物評定は、客観的に行なうことが難かしいとは言え、卒業見込み時であると卒業後であるにもかかわらず、同じ評定が下される筈である。

一般常識からは同一人についての「成績表」は何回提出せられても同一であると考えられるが、以上のごとく見てくると必ずしもそうでもなさそうだということに気付く。「成績表」に何ら変化のなかった者の数は、第2表に示されているごとく、わずか10%代にしか過ぎず、残りの80%以上のものは何らかの変化が新旧の「成績表」間に見られる。

第2表 「成績表」に変化のなかった者

	1964	1963	1962	計
公立校	9	11	13	33
私立校	1	1	3	5
私基立校	1	1	1	3
国立校	0	0	0	0
計	11	13	17	41
(再受験者全体に対する割合)	(9.9%)	(15.0%)	(18.5%)	(14.1%)

以下、記載事項別にその異同の状態を見ることにする。

A. 成績

同一志願者の新旧「成績表」を比較して両者の成績間に変化のなかった者の数は第3表に記されているごとく，1962～1964年度に国際基督教大学を二度以上受験した者のちようど半数に相当する。

第3表 成績に変化のない者の人数

	1964	1963	1962	計
公立校	37	30	43	110 (52.1%)
私立校	10	6	9	25 (46.3%)
私立校	3	4	2	9 (45.0%)
国立校	0	1	0	1 (20.0%)
計	50 (40.0%)	41 (47.1%)	54 (58.7%)	145 (50.0%)

成績に変化のあった者のうち，その変化が有り得ざる変化であった者は虚偽の記載による変化と見なし「虚偽」とし，変化が第3学年度のみである者は，そのすべてが3学期の成績によって生じた変化とは考えられないが，真偽が不明であるところから「不明」として分類すると，第4表のごとくになる。

変化のあった者が，全体の50%で，その中の48.2%すなわち全体の24.2%の者の成績には明らかに虚偽と断定しうる記載があったということは注目すべきで，「高校より提出される調査書の記載は必ずしも信用できない」という世の風評を裏書きする結果となっている。しかしこの事実から，全ての大学に提出せられている調査書に同程度の虚偽の記載があると推測するのは早計で，国際基督教大学が入学者選抜に際して「成績表」を重視するということを公表しているために生じた同学特有の現象であるかもしれず，高校より提出せられた調査書の信憑性について云々するためには，同様の研究が他の大学，ことに国立大学でも行われることが必要であろう。

第4表 成績に変化のある者の人数

	1964		1963		1962		小計		計
	虚偽	不明	虚偽	不明	虚偽	不明	虚偽	不明	
公立校	17	26	8	24	17	9	42 (19.9)	59 (28.0)	101 (47.9)
私立校	10	3	7	3	3	3	20 (37.0)	9 (16.7)	29 (53.7)
私基立校	0	3	1	2	5	0	6 (30.0)	5 (25.0)	11 (55.0)
国立校	1	1	1	0	0	1	2 (40.0)	2 (40.0)	4 (80.0)
小計	28 (25.1)	33 (29.8)	17 (19.5)	29 (33.3)	25 (27.2)	13 (14.1)	70 (24.2)	75 (25.8)	註：（ ）内は %を示す。
計	61 (55.0)		46 (52.9)		38 (41.3)		145 (50.0)		

虚偽の記載が、公立国立などの国公立校と、それ以外いわゆる私立校のどちらに多いかを χ^2 法により検してみると、 $\chi^2=6.952$ で1%の危険率で有意となる。すなわち、私立校の「成績表」の方が国公立校のそれよりも虚偽の記載がなされていることが多いといえる。

原らは、国際基督教大学に1963年度に1校より4名以上の者が受験した高校につき、各校ごとに高校成績と入試成績との相関係数を算出しているが、その計算せられた係数と、「成績表」における虚偽の記載の有無とを比較してみると、虚偽の記載の発見せられた高校はいずれも低い係数を持っていることに気付く。

ことに名門私立校として知られているA校の係数が、同程度のK校に比べて著しく低いが、これは新旧を照合し得たA校の「成績表」の全てに著しい虚偽の記載が発見され、K校のそれには全く虚偽の記載が発見できなかったという事実と考え合わせてみると、今後大学入学者選抜資料として高校調査書を用いるためには、“岡部私案”に記されているエール大学で行われているごとき処理が必要であることを感じさせる。

成績の変化がどのようなものであるかを知るため成績が何段階変化しているかということと、変化した科目がいくつあるかということについて調べてみた。成績の変化の殆んどすべてが1段階で、2段階変化したものは1964年に4例、1963年に3例、1962年に5例にしかすぎなかった。現役すなわち卒業見込み時の第3学年の成績と、卒業後のそれとを比較してみると、概して卒業見込み時の成績の方が高いようである。また卒業後の変化をみると、卒業後の時間が経過しているほど、すなわち浪人1年目よりも2年目が、浪人2年目より3年目の方が高くなっているようであり、1や2の段階の成績は3以上に変えられる傾向があるように思われる。

なおここで特に指摘しておきたいことは、旧い「成績表」が教諭により記入され、新しい「成績表」が事務職員によって記入された事例が5例あったが、そのすべてにおいて新しい「成績表」の成績の方が低く、しかもいずれも虚偽の記載とされるものであったということである。このことは最初に記載した教諭が指導要録に記されている成績に水増しをした高い点を記したのに対し、事務職員が指導要録の記載をそのまま引き写したために生じたのではないかと疑いを生ぜしめる。もし、前記の疑いが真の原因を指しているものであれば、新旧の「成績表」間の成績の記載に不一致が見られなくても、ことにそれが同一人によって記されている場合には、指導要録の記載と違う可能性も相当に大であることを示している。

なお蛇足にわたるかも知れないが、指導要録の原本の他に調査書用の原簿を作製している高校もあること、ことに最近においては何枚も調査書を書く手数を省くため、感光紙を利用することも多いが、そのためには薄紙に印刷されたものに原本を書き写す必要があり、それが調査書用の原簿となっている実例のあることを記しておきたい。

成績に変化のあった科目数は第5表のごとくである。国公立校では51名、48.6%のものの成績変化が2科目以下であるのに対して、いわゆる私立校では11名、27.5%にしか過ぎず、私立校においては成績の変化している科目数が多いということを示している。私立校の科目数別変化を「虚偽」と

第5表 成績変化科目数

学校種別	受 験 年 度 変 化 科 目 数	1964	1963	1962	計
公立校	1	10	9	6	25
	2	9	7	6	22
	3	6	4	4	14
	4	7	4	2	13
	4以上	11	8	8	27
私立校	1	1	0	0	1
	2	3	1	1	5
	3	0	2	0	2
	4	4	2	3	9
	4以上	5	6	2	13
私 基 立 校	1	2	1	2	5
	2	0	0	0	0
	3	1	0	0	1
	4	0	1	2	3
	4以上	0	1	1	2
国立校	1	2	1	1	4
	2	0	0	0	0
	3	0	0	0	0
	4	0	0	0	0
	4以上	0	0	0	0
計	1	15	11	9	35
	2	12	8	7	27
	3	7	5	4	16
	4	11	7	7	25
	4以上	16	15	11	42

『不明』とに分けてみると第6表のごとくになる。

第6表 私立、私基立校変化科目数の種別

変化科目数	虚 偽	不 明	計
1	2	4	6
2	4	1	5
3	0	2	2
4	8	4	12
4 以上	12	3	15
計	26	14	40

この表から知りうることは、私立、私基立校において「成績表」に虚偽の記載ありと指摘できうる者の多くは、相当多数の科目の成績が原本と違っているということである。

B. 人物評定

人物評定の記載に変化のあった者の数は第7表、変化した項目数は第8表のごとくである。

第7表 人物評定の変化のあった人数

	1964	1963	1962	計
公 立 校	55	43	51	149 (70.6%)
私 立 校	17	13	11	41 (76.0%)
私 基 立 校	2	3	3	8 (40.0%)
国 立 校	1	2	1	4 (80.0%)
計	75 (67.6%)	61 (70.2%)	66 (71.8%)	202 (69.7%)

これによると、志願者の約70%の人物評定に変化があり、全ての項目に変化のあった者もいるが、平均すると変化のあった項目数は1.7となる。

変化の状態を知るために、変化の巾と変化の方向、すなわち評価段階が

旧「成績表」の記載に比べて新のものが上昇したか、下降したか、その段階は何段階かということを見ると第9表、第10表のごとくになる。変化の方向には傾向が無く、変化の巾は殆んどのものが1段階であるが、中には2段階のものもいることを知りうる。

第8表 人物評定の変化項目数

変化項目数		1964	1963	1962	計
公立校	1	31	24	25	80
	2	15	11	17	43
	3	7	5	9	21
	4	2	3	0	5
私立校	1	7	5	4	16
	2	6	6	5	17
	3	4	2	2	8
	4	0	0	0	0
私基立校	1	2	2	2	6
	2	0	1	1	2
	3	0	0	0	0
	4	0	0	0	0
国立校	1	1	0	0	1
	2	0	2	1	3
	3	0	0	0	0
	4	0	0	0	0
計	1	41	31	31	103
	2	21	20	24	65
	3	11	7	11	29
	4	2	3	0	5

第9表 人物評定の変化段階中

変化段階中		1964	1963	1962	計
公立校	1	75	61	76	212
	2	15	12	10	37
私立校	1	21	18	16	55
	2	6	5	4	15
私基立校	1	7	4	4	15
	2	1	0	0	1
国立校	1	3	4	2	9
	2	0	0	0	0
計	1	107	87	98	291
	2	22	17	14	53

第10表 人物評定の変化の方向

変化の方向 変化段階		1964				1963				1962				計			
		上昇		下降		上昇		下降		上昇		下降		上昇		下降	
		1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
公立校		38	9	37	6	42	5	19	7	40	5	36	5	120	19	92	18
私立校		9	4	12	2	8	3	10	2	9	2	7	2	26	9	29	6
私基立校		4	0	3	1	2	0	2	0	1	0	3	0	7	0	8	1
国立校		2	0	1	0	2	0	2	0	1	0	1	0	5	0	4	0
計		53	13	54	9	58	8	33	9	51	7	47	7	158	28	133	25

どの項目が最も変化しているかを見ると活動性が最も多く（全体の43.6%）社会性（30.9%），情緒の安定度（24.4%）公民性（17.9%）の順になっている。（第11表）

第11表 人物評定各項目毎の変化者数

項 目		1964	1963	1962	計
公立校	情緒安定度	18	15	13	46
	社会性	22	20	25	67
	活動性	36	26	30	92
	公民性	14	12	18	44
私立校	情緒安定度	9	6	3	18
	社会性	8	6	6	20
	活動性	11	9	9	29
	公民性	3	2	2	7
私基立校	情緒安定度	0	2	1	3
	社会性	1	0	1	2
	活動性	1	2	1	4
	公民性	0	0	1	1
国立校	情緒安定度	1	2	1	4
	社会性	0	1	0	1
	活動性	0	1	1	2
	公民性	0	0	0	0
計	情緒安定度	28	25	18	71
	社会性	31	27	32	90
	活動性	48	38	41	127
	公民性	17	14	21	52

以上は変化のある者についてみたのであるが、今度は変化のなかった者について、その評価がどのようなであったかをみると第12表のごとくである。

第12表 人物評定に変化なき者の評点

	1964	1963	1962	計
a のみ	23	16	13	52 (58.5%)
b か 1 項目で a か 3 項目	8	6	6	20 (22.5%)
b が 2 項目で a が 2 項目	4	3	4	11 (12.4%)
その他	2	1	3	6 (6.7%)
計	37	26	26	89 (100.0%)

変化のなかった者の半分以上が4項目とも“a”のみであり、わずか20%に満たないものが“a”が2項目以下であった。このことは、人物評価に変化のなかった志願者は、よほどすばらしいパーソナリティの持主であるのか、それとも評定者が意識的に良い評定をしたためのどちらかであると考えられる。

以上の諸事実と全ての志願者に与えられている評価は“a”または“b”のみであり、“c”がごくわずかで“d”は数例にしか過ぎないという事実とを考え合わせてみると、人物評定の困難さと同時に、人物評価の記載に際して評定者は大学入試における効果を考えた評定をなしているのではないかと疑いを生じる。したがってこのことは逆にある志願者に“c”以下の評定がなされている場合には、相当に注目すべきものであることを示していると考えられるが、a—c, b—d のごとき2段階の変化のみられた者も居ることを考慮に入れておく必要がある。

C. 学習成績概評

学習成績概評に変化のあった者は、第13表に示すごとくごく少数であり約10%にしか過ぎない。

これらの変化のあった者の殆んどは、旧い「成績表」が提出された時に高校3年であった者で、そのいずれもが高校3年時の概評の方が高かった。このことは、前に成績の項でみた事実と一致し、卒業見込み時には見込み点として良い成績や概評を記す傾向があると言いうる。

第13表 学 習 成 績 概 評 の 変 化

	1964	1963	1962	計
公 立 校	8	4	6	18
私 立 校	4	3	1	8
私 基 立 校	1	1	1	3
国 立 校	1	1	0	2
計	14	9	8	31

D. 成績段階人数

2学期末には存学していても卒業できない者がでてきたりすることもあるので、成績段階人数の項は卒業見込み時と卒業後とにおいては1, 2名の変化は考える。しかし、現実の問題としては、第14表に示されるがごとく変化した者は殆んどなくわずか3.8%にしか過ぎない。しかも2名を除いて他の者は、いずれも考えられる範囲内での変化であるということは、この段階人数に関しては、虚偽の記載は殆んどないとすることができよう。

第14表 成 績 段 階 人 数 の 変 化

	1964	1963	1962	計
公 立 校	3	1	1	5
私 立 校	2	0	0	2
私 基 立 校	1	1	1	3
国 立 校	1	0	0	1
計	7	2	2	11

E. 欠席日数

欠席日数の変化のうち、明らかに虚偽の記載によるためとされるのは、1964年度4名、1963年度3名、1962年度6名の計13名（4.5%）にしかすぎない。

F. 行動の記録

行動の記録の欄に記載されている内容は、抽象的な紋切型な言葉の羅列に終始しており、特に入学選抜のために重要な情報は得ることができそうもない。したがって、行動の記録の欄は厳密な比較を行わなかったのもので、異同については言及することができない。

ま と め

志願者の出身高校々長より提出される調査書を入学者選抜のための資料として用いるためには、調査書に記載されている内容が、高校に保存されている指導要録と一致していること、すなわち調査書には虚偽の記載がないということが前提となる。筆者は調査書の信頼性を確かめるために、国際基督教大学を1962年、1963年、1964年に志願した者のうち、2回以上受験した者291名（全受験者の7.1%）について、高校長より提出せられた「高等学校成績表」（調査書）の記載内容の異同を調べてみた。

記載された成績のうちに、明らかに虚偽の記載があると断定しうる者は70名、24.2%にも達している。この数字自体驚くべきものであるが、その他の事実を検討するとき、「成績表」の記載に変化のない者のうちにも、指導要録の原本と異なる虚偽の記載のなされている可能性もあると考察しうる。また、出身高校を国公立と私立に二大別したとき、私立の方に虚偽の記載が多く見られる。

「高校調査書に記されている成績の方が、大学入試成績よりも、大学在学中の学業成績に対する予測性が高い」とは言われているものの、調査書を入学者選抜の重要な一資料として用いるときには、高校の格差ということも考慮に入れて、少くとも“岡部私案”にみられるがごとき操作が必要ではなからうか。

欠席日数、学習成績概評、成績段階人数などの項にも明らかに虚偽の記載としうるのも少数ながら見出せた。

高校3年に在学中の時に提出せられた「成績表」中に記載されている3年次の成績記録の方が、翌年卒業後に提出されたものの記載よりは良い点

が記されているような傾向が見られる。学習成績概評でも同じ傾向が見られ、これは教師が第3学年次の点（見込み点であるが）を記す際に良い点数をつける傾向があるためと考えられる。

行動の記録の欄は、抽象的な紋切型な単語が記されているのみであり、入学者選抜に際して重要な情報を得ることは期待できない。

人物評定のために、情緒の安定度、社会性、活動性、公民性の4項目について、a～eの5段階の記述がなされ、そのいずれかに○印を記すことになっているが、殆んどがaまたはbに集中しており、その拡がり是非常に少ない。また、その評価に変化のあった者が70%もあり、評価が2段階変化した者も相当あることなどを考えると、この人物評定のための欄は、入学者選抜に際して望ましいパーソナリティの持主を見出すために役に立つとは到底考えられない。

以上、高校より提出された「成績表」のうちには相当数の虚偽の記載のあるものが存在すること、入学者選抜に際して全く役に立たない記載のあることを指摘した。このことは、現状では調査書を入学者選抜のための重要な資料とすることに対するちゅうちょの念を生じさせる。しかし、調査書の成績の方が、入学試験成績よりも大学在学中の学業成績を高く予測しているという点からもその活用が望ましく、大学側における活用方法の研究も必要であるが、調査書の価値を自ら引下げている記載者すなわち高校側の反省を望みたい。（本学助手）

（1）湯浅 洋「大学学業成績の予測について」卒業論文、1958年

（2）原 一雄ほか「入学者選抜試験に関する調査報告」未公刊、1964年

（3）岡部弥太郎ほか「大学の入学試験に関する研究」学生問題研究所研究報告第6冊、昭和38年9月

（4）西堀道雄ほか「大学入学試験に関する研究」国立教育研究所紀要第37集、昭和38年2月

（5）西堀道雄ほか「高等学校時代の学業成績と大学入学試験とではそのどちらのほう大学に入ってから学業成績との関係が深いのか、第1報、第2報」国立教育研究所資料 No. 3, No. 5, 1962年5月, 1963年6月

(6) 西堀道雄ほか「大学入学試験に関する研究Ⅲ」国立教育所紀要第41集，昭和39年3月

(7) 岡部弥太郎「大学入学試験制度改善案（岡部私案）」学生問題研究報告第6冊附，昭和37年9月

(附1)

1. 情緒の安定度

- a. 試練にあっても堅実に，明確に，確固として工夫しつつ進んで行く。
- b. 堅実であり，明確で，確固として工夫するところがあるが，困難な状態におかれるとぐらつくことがある。
- c. ふつうの問題については安定性を充分保ち，他人の助けを有効に利用する。
- d. 移り気であり，困難な状態におかれると緊張のあまり，理由なく何にでも頼ろうとする。
- e. 容易にうち負かされ，ものごとをあきらめる——情緒的不安定を示し，かんしゃくを起こし，予期しない事柄や気にいらぬ事柄にぶつかる何にでも逆らいたがる。

2. 社会性

- a. 進んでよい友をつくり，学生仲間から友としてまた指導者としてうけいれられる。
- b. 友をつくり，他から友としてうけいれられる。
- c. ある限られた仲間の中で友をつくり，また友としてうけ入れられる。
- d. じっさいに他をさけ，ほとんど他から友としてうけいれられない。
- e. 他とぶつかり易く，他からさけられ，批判を受けている。

3. 活動性

- a. 普通量以上に大きな仕事を継続しうる力をもっている。
- b. 何かの奨励または圧力によって，普通量以上に大きな仕事のある期間になしとげる力をもっている。
- c. 普通量の仕事をなしとげる力をもっている。
- d. 疲れたり，無気力になったりして，普通量の仕事も一気にでき上らない。
- e. 概して疲労しやすく，無気力である。

4. 公民性

- a. 偏見なく，健全な判断力をもち他人の意見を尊重する。
- b. 概して偏見なく，判断は健全であり他人の意見を尊重するが，時々情勢に支配され易い。
 - ・強く支持するのでも反対するのでもなく，みんなの意見について行き易い。
- d. 多くのばあい，自説をまげず狭量であって，他を圧迫するが，時々情勢に

よって変る。

e. 自説を固執し狭量であり他を圧迫する。

(附2) 1965年度に再受験をしたものは、受験者999名中98名である。それらの者の新・旧「成績表」を比較したところ25名(25.5%)の者の成績に虚偽という記載があり、その内訳は公立高校出身者72名中15名(20.8%),国立高校出身者3名中2名(66.6%),私立高出身者22名中8名(36.4%)である。

A Study Concerning the Reliability of High School Reports for the Entrance Examination

(English Résumé)

Kazuhiko Nakayama

In order for high school reports to be used reliably as one of the criteria for screening, it is required that the information in the reports are identical with the records kept at high schools. The writer studied and compared the identity and differences in such reports for 291 applicants who had applied ICU more than twice in 1962, '63, and '64 examinations.

Surprisingly, the large number of 70 reports (24.2%) were revealed to have differences in grades in reports submitted at different times.^{*} This means that they were falsely reported. From examining other facts, it could also be supposed that some reports without any difference in their grades were possibly not identical with the original records at school. Reports from private schools revealed more false statements than those from public or national high schools.

It is said that high school records have higher predictability of college grades than the total score of the entrance examination. When high school grades are used as one of the important data for screening, however, the differences among high schools should be taken into consideration as Okabe's proposal for manipulation of reports from different high schools.

In addition to false reports on grades, it was also found in a few reports that the number of absences, overall evaluation of grades, the number of students at each grade level, and the like were falsely reported.

There was a tendency for the grades in reports submitted

while students were still attending the last year at high school, to be better reported than in those written after their graduation. The same was true with the overall evaluation of grades. It can be hypothesized that teachers tend to give better marks for the last year (which are expected grades) when they write reports.

Records of activities were in almost all cases written in abstract and stereotyped words and could hardly be expected to provide any important information about the applicant.

There is a column in the report for personality evaluation, in which the applicant is to be evaluated on four items; emotional stability, sociability, and citizenship, according to five-point scale (a-e). Most students were evaluated on most items either "a" or "b". Seventy per cent of the applicants were evaluated differently in different reports, a large number of whom were evaluated even two points higher or lower. These show that this column for personality evaluation cannot possibly be used in screening.

As thus revealed, there were a large number of false reports and meaningless evaluation which reduce the value of the high school reports in screening applicants. However, in the sense that high school grades still better predict college grades than points at entrance examination, it is wise to utilize the report and not discard it completely. In order to do so, the university should of course study better methods for utilizing it. More than that, it is strongly hoped that the high schools which have reduced the value of their own reports should take this fact seriously and correct their attitude in reporting about their students.

- * Similar results were found on the 1965 applicants from the analyses of their high school reports. This is the consecutive fourth year that nearly one-fourth (25%) of the grade reports had false statements.